

法遍寺 から大切な 皆様へ

2024年5月1日

日蓮正宗 年間方針

折伏前進の年

法遍寺・天晴寺支部活動方針

講中一結・万難を排して

折伏実践

年間実践テーマ

① 勤行・唱題で歡喜の活動

根本を欠かさず家族

そろって弛まず実践

② 講中一結して折伏実践

「異体同心」・「師弟相對」

の信心で

広宣流布に邁進

③ 支部総登山と寺院参詣
で人材育成

死身弘法の決意と歡喜

の生活・切磋琢磨

しながら家庭訪問

〒488-0881

愛知県尾張旭市城山町三ツ池6075-1

(電話番号：0561-54-9226)

相談無料 <https://hohenji.net/>

2024年4月14日 御報恩御講の様子

慧光山 法遍寺(えこうざん ほうへんじ)について 住職 近藤道正

法遍寺は、静岡県富士宮市にある「多宝富士大日蓮華山大石寺」を総本山とする日蓮正宗の寺院です。日蓮大聖人様の正しき信仰を人々に弘め、ここ愛知地域の全ての人々が真の幸せをつかむ為に、総本山第67世日頭上人が開基となって、昭和57年6月18日法遍院として設立され、平成20年12月23日には改築され、法遍寺となりました。日蓮大聖人様の出世の本懐である三大秘法の大御本尊に帰依(きえ)し、破邪顕正の布教活動をさせていただいております。

① 講中のみなさまへ「唱題による体験こそ広宣流布の源泉」

人には恨(怨)むという心が存在する。この害毒は人の心のエネルギーを奪い、さらに体内にも浸透して活力を失い、心身ともに崩壊の一途をたどる。真剣な唱題は、恨みの元である貪欲・瞋恚・愚痴の三毒を成仏させ、気がつけば過去の出来事を受け入れ、他人を慈しむ境界へと変える。大聖人は「人をあだ(怨)むことなかれ。眼あらば経文に我が身をあわせよ」(御書568)と仰せになった。「眼」とは単なる目ではなく、「心と魂」のことである。そして「経文」とは法華経の文底のお姿であり、これを大聖人は戒壇の大御本尊として顕された。魂のこもった信心こそが人生を変える。怨む心の強い人は「成仏」の道を自ら塞いでいる。怨む心が消えるまで御本尊に題目を唱えきることが自身の救済である。そして唱題によるすべての体験が妙法広布の源泉であることを知ろう。

② 創価学会に籍を置くみなさまへ(創価学会破門の経緯を知ろう その45)

〈前号に続き、「創価学会破門通告書」の「第五(三)」を原文のまま掲載する。〉

(三)しかるに、池田氏は、昨年十一月十六日の第三十五回本部幹部会において、「五十周年、敗北の最中だ。裏切られ、たたかれ、私は会長を辞めさせられ、ね。もう宗門から散々にやられ、正信会から。馬鹿にされ、そいでその上北条さんが『もう、お先まっ暗ですね。』『何を言うか、六十周年を見ろ。もう絢爛たる最高の実が、六十周年が来るから元気だせ。』会長だから、これがよ。私は名誉会長だ。『そうでしょうか。』馬鹿かー。」と発言し、また森田一哉氏は、本年三月十八日の杉並ビクトリ一勤行会において、昭和五十二年路線当時と現在とを対比し、

「十年前は堂々とできなかつた。一言も言えなかつた。それで失敗しましたんで、今度は堂々とやっている。」と発言し、さらに最近では、柏原ヤス氏が、本年十一月二十六日付『聖教新聞』紙上において、

「今の宗門をみていると、結局、十数年前も同じね。あの時、学会は一步譲って宗門のいう通りにしたけれど、あの時も学会は正しかった。」と発言しております。これらの発言をはじめ、最近における創価学会の宗門に対する攻撃は、まさに「山崎・八尋文書」「北条文書」等の、「宗門支配か、しからずば独立か」との野望を、そのまま密かに懐き続け、機会を窺っていたことを示すものであり、昭和五十二年路線の反省が、まさしく欺瞞であったことを証する、無慚無愧の著しい背信行為といわなければなりません。

(次号で破門通告書の掲載は終了する)